

---

# 走れメロス～セリヌンティウス、激動。

スコッティ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

走れメロス／セリヌンティウス、激動。

### 【Nコード】

N0259L

### 【作者名】

スコッティ

### 【あらすじ】

太宰治の代表作として第一に挙げられる作品、走れメロスにおいて、主人公メロスと友情を誓った石工セリヌンティウスの物語。作中では描かれなかった三日間を綴った作品・・・なのだと思う。友人とのリレー小説で始めたものです。

## （前書き）

友達同士でリレー小説した際に出来上がった作品です。

いろいろとひどい部分があることは否みません。

まじめにやる予定だったんですよ？

文学作品としての流れメロスの要素は皆無です。注意してください。

私はセリヌンティウス。 町で石工をやっている者だ。

今日もまた客からの注文を受けているものの作成に取り掛かる。

ドンドンッ！！

ふむ？

扉を強く叩く音が聞こえた。私は顔をしかめながらも、扉を開けた。すると、そこにいたのはこの国の兵士二人が立っていた。

「失礼だが、この家に何用か？」

私は兵士にそう尋ねた。

「貴公がセリヌンティウスだな？」

「その名は確かに私の名だが……」

私に一体何の用だ？まさか私が今夜のいけにえなのか！？

「王城に来て貰おうか」

兵士はそういうと、私の腕を乱暴に掴み、家から引きずり出そうとする。

「や、やめろ！離せ！私が何をした！？」

「黙れ」

後頭部に強い痛みを感じた。

それと同時に意識が途切れた……

私は目をさました。

私の目には天井が見える。

私はとりあえず起き上がったが頭部の痛みは消えてはいなかった……。

辺りを見回す。

どうやら私は檻に捕まっているようだ…。

私はどうされるのだろうか？

やはり、殺されてしまうのだろうか。

ふと、頭をよぎるものの姿があった。

「嗚呼、メロス…」

呑み込んだ言葉は あいし てる

足音のカツンカツンという音とともに鍵のジャラジャラとした金属音が近づいてくる。

看守である。

看守は慣れた手つきで、扉の鍵を開ける。

「出る」

看守は私の腕を掴み、檻の中から出した。

私が連れ出された場所には、十字架と二人の男が立っていた。  
メロスとこの国の王、暴君ディオニス王である。

ざわ…ざわ…

観客がざわめいている。

「メロス……、これは一体何なんだ？」

私は、親友に問う。

「……………すまない。」

メロスは下を向きながらいった。

「俺は、お前を売ったんだ…」

「……そうか」

私はそれだけで理解した。「理由は聞かない」

「……すまない」

私たちは抱き合い、メロスは旅だった。

私は王の前にでた。

「さあ、私を十字架にかけるがいい。」

王は皮肉った表情で言う。

「奴が戻って来る可能性はゼロに等しいぞ？」

「いや、メロスは必ずや帰ってくる」

「ふん、若いんだよなあ」

王は顎で兵士にセリヌンティウスを磔にするように命令した。

「アーーーーーッ！」

こ、これは、そ、そんなばかな!?

私は戦慄した。

なんと、私を張り付けにしようとした兵士は驚くべきテクニックで私を喜ばせた。

「こつ、これは……」

私はその場で意識が途切れた……。

目覚めた私は磔にされて……いなかった。

恐らくどこかの建物の中、牢屋ではない何処かに寝かされていた。全裸で。

周りにめをやる所には、あの兵士が立っていた。全裸で。

「石ばかり彫ってる、お前を掘ってやるよ」

兵士が言う。

その言葉にセリヌンティウスは紅潮した。

「私を……掘ってっ！！」

兵士は私に近付き、そして……

「アーーーーッ！」

「あ、アーーーーッ!!!」

すまない……メロス……

私はその場で満足し楽しんだ……。

「ア……………ア、ア……………」

|||||

「……ッ！」

私は満足した。

しかし、本当の快樂はこれで終わりはしなかったんだ……。

「ふむ。中々楽しんでるようではないか」

兵士のテクニクに悶えながら、顔を声の方に向けると、なんと

うーとだろー

か国王ディオニスがいるではないか。

「こ、国王……」 「貴様はメロスが帰ってくるまでの人質

という身。そ

「私に国王の地位を譲るというわけだ。それがどういう意味かわかるか？」

「一体……どういふことですか」

「要するに私が貴様に何をしようとするかということだ」

「え.....」

すると、突然国王が自分の首の皮を掴み、上へ引つ張り上げた。

「まさか、こんな上玉が手に入るとは思わなかったよ。さあ！俺を

存分に楽しま

「せてくれ！」

何ということだろうか、国王の正体はガチムチでお馴染みビ〇ー・

ヘリンオン)

愛称 兄貴) だったのだ! (分からない人はググレ!)

そんな兄貴だが・・・巷では『パンツレスリング兄貴』の二つ名を持つとか・・・

・・・。そんなお方が、一体なぜ国王のマネを?

「ははは。一体何を言ってるんだい? 俺は正真正銘国王だぜ?」

「え」

「訳あってジジイの姿をしているだけだ。まあ、俺のことは兄キングでも呼んでくれ」

ああ・・・なんということだろう。このお方がもしこの町を統べていることが他の

の国にでも知れ渡ったら、その日からこの町の通称は『ゲイタウン』にでもなつ

てしまうのではないだろうか。

「さて・・・では、早速続きをしようじゃないか」

「あ・・・しかし」「どうした?」

ゲイ界の白馬に乗った王子様とも呼ばれるこの方とだなんて・・・まさか、こん

な夢のような日が来るなんて思いもしなかった。ちゃんと化粧しとけば良かった

・・・。

「もしかして、普通に楽しむだけじゃ、もう物足りないのかい? しようがない。

ここは彼に頼もうか」

「彼・・・?」

「ランランル」

「!」

いつの間にか、部屋にもうひとり入り込んでいる。

「ド○ルドはね、男子がだーい好きなんだ!」

こ、このお方は、ドナルド・マ〇〇ナルド！！通称『教祖様』！！とあるCMで子供達とこの意味深な動き『ランランルー』をしていることから『

教祖様』と呼ばれるようになったこのお方がなぜここにい．．．！「さつきも言っただろう？ドナルドはね、男子がだーい好きなんだ！」

「そういうとき。彼も中々のテクニクの持ち主だね。きっと君も満足できるさ」

「ランランルー！」

ああ、なんとということだろうか。兵士が我を見失って信者に．．．．

「ランランルー！」

うん？またいつの間にか誰か入り込んできていたようだ。

「おお、ス〇夫君！もう、体は大丈夫なのか？」

なぜだ。髪型に個性がある少年が『ランランルー』している．．．．

「はい！今すぐにも続行可能です！」

「よし！まずは君からだね！」

すると、教祖様がス〇夫と呼ばれた少年に近付き、あんなこと、こんなことを始めた。

「アーーーーーッ！！マーーーーーッ！！」

少年は叫びながら、快楽に落ちていった．．．．。

「さあ、イツツショータムだ」

国王が私に近づいてくる．．．。

メロス．．．．本当にすまない．．．．。私は君のことが好きだった。初めてであったあ

の酒場で君を見たとき、私は驚愕してしまった。この世に君みたい

な素晴らしい

男がいるなんて僕には信じられなかった。たくましく鍛えられた上腕、たくまし

く鍛えられた腹筋、たくましく鍛えられた背筋、たくましく鍛えられた胸筋、た

くましく鍛えられた……表情筋……

すべてが芸術的で、私の目を引き付けさせた。

私は、正直君が嫌いだった。あまりにも美しすぎて私は君に嫉妬していたみたい  
だった。

でも、そんな感情はすぐに消え失せた。  
君が罪なほどに、やさしすぎたからだ。

私はいつの間にか君の優しさに魅力されてしまっていたようだ。

今ならちゃんと言える。

メロス、私は君がこの世で一番……

「……では、逝くぞセリヌンティウス？」

さらば、我が永久の友、メロス……身体は汚されても私の心は君だ  
け……

「ああああああああああああああああアー……」

「……………ッ……!」

私は深い泥沼のような闇に堕ちていった……

「素晴らしい！君は芸術的だ！」

国王は私に素晴らしいテクニクで喜ばせる

一方その頃、メロスは村に戻るため、疲労した足にむちうつていた。

そんなことを無論知らないセリヌンティウスは心も身体も国王によつて完璧に汚

されてしまっていた……

そして、約束の日に……

「陛下……、陛下あ……！」私は陛下といつもの遊びに勤しんでいた。

結局メロスはセリヌンティウスのもとに来ることはなく、彼はその身を一生暴君にもて遊ばれることとなった。

………という夢を見た。

目の前には石の固まり。

どうやら私は夢を見ていたようだ。

最初から最後まで全て夢だったが、いい夢だった。

コンコン、と。

突然、ドアのノックがした。

やれやれ、一体誰が来たのかな。

私は扉を開けた。

そこには二人の兵士がいた。

これは、まさか……

「貴公がセリヌンティウスだな？」

さっきまでみていた夢とおなじようにかたる兵士。

そんな……まさか……

「国王陛下が呼びだ。きたまえ」

この日、セリヌンティウスは国王に呼ばれ、王宮へ訪れた。  
そののち、彼がどのような三日間を過ごしたかは誰も知らない。  
誰も知らない……

セリヌンティウス編 完

（後書き）

現在メロスの妹の花婿の話製作中。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0259/>

---

走れメロス～セリヌンティウス、激動。

2010年10月28日01時05分発行